

T A O G E N

発行人◎高田かつ子 ☎048-881-9111〒336 浦和市南浦和3-19-2-303 編集人◎安藤哲朗
事務局◎下山昌孝方 ☎044-522-4185〒211 川崎市幸区小倉1-1 I-514

十二月十六日、念願の出雲へ向った。松江市・斐川町と、なつかしい旅だった。あの荒神谷の出土のさい、お世話になった有藤進さん、また、黒曜石のデータで御教示いただいた宍道正年さんなど。有藤さんと共に現在の斐川町の文化課課長の富岡俊夫さんに御同道いただき加茂岩倉(加茂町)の現地に着いたのである。

倉とは、埋納の時期がちがうと思えます。第一、埋納の場所が、荒神谷の方は扇状地から数メートル上の途中の土のなかであったのに対し、今回の方は十五〜六メートル上の頂上です。場所の状況が全くちがっています。

第三、もし両者が同時期の埋納なら、荒神谷の「小型銅鐸」も、今回の大・中銅鐸と、《重ね入れ》になっていてもいいのに、そうっていない(今回は、大・中《重ね入れ》です)第四、昨日報道された「X」印も、その《状態》が全くちがいます。①荒神谷では、九十パーセント以上、「X」がつけられていたのに、今回は、今のところ一つだけ。「右、代表」の形です。

かなり坂道を上ったあと、平地にたどり着く。工事用のトラックが置かれた、その平地から、さらに十数メートル上に、問題の現場がある。加茂町の教育委員会社会教育主任の吾郷和宏さんが現場へ案内して下さった。

「多元」十六号に掲載した「出雲銅鐸に関するデスクリサーチ」に続いて、古田武彦氏は先の言葉のごとく現地におもむき、逸早く報告を「古田史学会報」十七号に寄せられた。本誌は古田氏と古田史学の会の了解を得て、ここに転載する。

②荒神谷では、六個の銅鐸には全く「X」がないのに、今回は銅鐸につけられています。③一番肝心のことがあります。荒神谷の場合、下の端の「柄」のところ「X」がつけられています。ここに

出雲紀行

古田 武彦

使うための「X」と、

使わないための「X」。

そこには銅鐸が横むき

(「ひれ」が上)の形で土中に露出している。二個だ。その手前に削ぎ取られて銅鐸の形にくぼみ、青ずんだ上があった。なまなましい。

これは「矛」だと思っていますが、ともあれ「武器型祭祀物」が三五八本もあって、中心になっています。筑紫矛もありました。ところが、今回は、ほぼ近い時期の「中広形」や

は「木の柄」がかぶせて使われるわけですから、儀式の場などで使うときにはこの「X」は『見えない』わけです。製造者だけに《判る》という仕組みです。

観察が終わって降りてくると、意外にも、ジャーナリズムの人々に取り巻かれた。感想を聞かれた。わたしは答えた。

「広形」の矛(九州)、また「平剣」(瀬戸内海領域)が全く出土していません。銅鐸だけです。この点、対照的です。

ところが今回ののは、銅鐸の表面でデザインを《汚(けが)》しているわけですから、儀式の場などでは、使いにくい状態です。

「この前の荒神谷と今回の加茂岩

ですから、埋納直前にこの「X」

が入れられ《外部からの侵入、取り出し者》のないように、マジカルに『祈念』したもののように見えます。

「X」の入れられた時点は、おそらく、荒神谷の場合、製造直後、まだ冷え切らないときではないか、と思います。鉄ならもちろんですが、固い竹などの切っ先でも、あるいは入れることができたかもしれせん。ところが、今回ののはもう銅鐸面が冷えて固くなったあとですから、鉄の刃物を使ったのではないでしょう。

ここで一つ提案があります。それは

「Xの筆跡の科学検査」です。外形は外から観察できますが、銅器の場合、問題は「深さ」です。その「深さ」の変化の追跡から「筆跡」が分かるわけです。これにはいい方法があります。レーザー光線による反射光の測定です（平坦度測定器）。

これによって荒神谷の大量「銅劍」の三百二十数個の「X」を測定し、表やグラフにする。一方、今回の「X」に対し、同じ方法で測定し、それが荒神谷の方のグラフの中の、あるいは外の、どの位置にあるか、判定するわけです。これは是非やっ

てはありせんから、他の方々と協力していきたいと思えますので、皆さんジャーナリストの方々も御支援下さい。

要するに、荒神谷と加茂岩倉とは別集団です。もし「同一集団」という言葉を使うなら、「歴史的同一集団」です。加茂岩倉の集団の人々は、荒神谷の「X」印入りを、「伝承」として知っていたわけです。ですから「荒神谷の後継者」と考えていいでしょう。

以上であった。右のポイントを言葉にすれば、荒神谷の方は製造工房をしめし、「使われるためのX印」、加茂岩倉の方は「使われないためのX印」と言えるのではないか。マジカルな意志は両者ともあるだろうが、見た目には同じ「X」印でも、その目的がおのずから別だ。

荒神谷には見事な展示館ができていた。忘れがたい。

翌日、出雲市の環濠集落を見た。文化財係主事の三原一将さんや皆さんのおかげだった。下古志町の正蓮寺周辺遺跡だ。幅四・八メートルの二重環濠が直径約四百メートルにわたるといふ。ただ、発掘は道路開発

の線内に限られ、全体像のごく一部、いわば断片にとどまっている。しかし、加茂岩倉の埋納時期の出雲をつんでいた軍事的緊張をしめすものとして、きわめて重要な発掘だ。おそらくこの環濠群の中心部には「宮殿」もしくは「神殿」があったのではなからうか。この点、注目したい。

このあと、斐川町出西公民館長の池田敏雄さんのご自宅に案内された。

出雲の中の出雲、その現郷だった。お聞きし、お見せいただいたお話や遺跡、言葉に尽くせぬほどすばらしかった。荒神谷と加茂岩倉の間にそり立つ大國（大黒）山。大國主命と少名彦名命の「国見の山」だ。改めて記そう。水野孝夫さんと太田齊二郎さん（運転）に導かれ、夜霧を越えて帰洛した。

（古田史学会報十七号より転載）

『多元』十六号に掲載の「出雲銅鐸に関するデスクリサーチ」が「古田史学会報」に転載されたが、その際古田氏による「付論」が併載された。同記事の理解のためにここに転載する。同号に併せ読まれることをお勧めする。

付論

今回の考察に対する「論理の筋道」を記しておきたい。

のである。

(一) 加茂岩倉の発掘が報せられてより、十月二十五日まで、私は「迷霧」の中にあつた。それは前回の荒神谷出土群と今回の出土群と、両者を「一連のもの」として理解していたからである。

(二) なぜなら、もしA型（一期）の主体（埋納者a）とB型（埋納者β）を同一集団である、としてみよう。「a||β」のケースだ。

この場合、数々の矛盾が現れる。その一をあげれば、A型では数量的に莫大なものは、三五八本の「銅劍」に莫大なものは、三五八本の「銅劍」

（私はこれを出雲矛と呼ぶ）であり、筑紫矛と小銅鐸が共埋納されている。ところが、B型では、ほぼ同時期の

と今回を別の時間帯に属するもの、という仮説を導入したとき、にわか

に「迷霧」の外に出ることができた中細型・広型／平型銅劍が、一切姿

を見せていない。一方では「剣」を拒否し、一方では「剣」を主とする。両者全く基本姿勢を異にしている。「 $\alpha \parallel \beta$ 」の立場は理解不能の矛盾に陥るほかはないのである。

(四)ところが「 $\alpha \neq \beta$ 」とすれば、問題は一変する。同じ出雲西部でも、「二期」と「三期」では様相を異にする。これは、他の例でいえば、同じ東京湾の西岸部でも、江戸時代と明治以降ではシンボル物は一変する。前者は「葵の御紋や武士の刀」などであり、後者は「菊と三種の神器」などである。これに比すれば出雲西部の場合、「銅鐸」という「神のシンボル」を共有するだけ、連続性はより強いと言えるかもしれない。

以上が骨子だ。詳細は「新聞の活字やテレビ」ではなく、「足」で知ったあとにする、これが鉄則、秋田孝季翁の教訓である。

一九九六年一二月一二日

古田武彦

十四号「あづまはやの分析」で古田武彦氏が取り上げた足柄山の山頂、矢倉岳の頂上の写真を日野千江子さんが撮影されました。箱根神社の社殿も古くはここにあってと伝えられています。



銅鐸と矛の出雲を巡る 出雲遺跡巡りの旅

——久し振りに古田武彦氏を迎えて——

本誌の記事からもうかがえるように、古田武彦氏は洛西に居を移されて後も、ますます歴史の探求に情熱を傾けておられますが、この春、ともに大量の銅鐸の出土に沸く出雲の地を巡って、年余の研究成果を語って下さることになりました。得がたい機会ですので、奮って参加されることを望みます。

◆日 程 4月5日(土)～7日(月) 2泊3日、現地集合・現地解散

◆集合/解散 松江駅前又は出雲空港

◆見学場所 加茂岩倉遺跡、荒神谷遺跡、出雲大社、島根県立埋蔵文化財センター、八雲立つ風土記の丘、出雲市環濠集落跡、神魂神社、熊野神社、和鋼博物館、美保神社など

◆行程中に古田武彦氏の講義が随時行われますが、さらに島根県埋蔵文化財センター長・宍道正年氏により、出雲の考古学発掘状況についての講演が予定されています。

◆参加費 4万5千円 (非会員 4万7千円) 1泊2日参加の場合はそれぞれ1万円割引。

◆お申し込みは事務局(1頁タイトル下に表示)宛て、電話・ファクスまたは葉書でお願いします。なおバスの都合で先着50名さままで締め切らせていただきます。

◆東京—松江・出雲間の交通について。

(イ) JR寝台特急「出雲」 往復約3万5千円

(ロ) 夜行ハイウェイバス「スサノオ」 往復約2万3千円

(ハ) 航空機(JAS) 往復約4万5千円

なお航空機については15名以上になりますと団体扱いになり、大幅に割引になりますので、航空機利用予定の方は、申込み時にあわせてお申し出下さい。

会員のページ
筆者はいずれも本会会員

続・皇后が三人づつ

小金井市 齊藤里喜代

三人づつの天皇のうち残りの二人の天皇（権力者）さがしは、おもわぬところで、新しい展開をみた。それは、父親だと思っていた磯城県主葉江（古事記では師木県主波延）が意外にも女性であることが判明したからだ。

第五代孝昭天皇第一の一書、淳名津媛、四は第六代孝安天皇第一の一書、長媛の四人である。

というのは、第四代懿徳天皇の第一の一書の皇后泉媛の親が磯城県主葉江の男弟の猪手とあるのに注目したからである。

磯城の県主が女であることは不思議でもなんでもない。神武紀に「菟田高倉山に望んだ時、国見丘上に八十帥、女坂に女軍、男坂に男軍」とあり、女軍（おんないくさ）が男軍より先に書いてある。近畿はまだ女性上位が残っている世界だったのである。

もちろん猪手は男性だが、弟にわざわざ男という文字をつけるのは、葉江が女であると解釈するのが自然だ。

そのことは、県主葉江と男弟猪手の関係が卑弥呼と男弟の北九州三世紀の状態と似ている可能性あり。しかし男性の王が当り前、例外の卑弥呼・壹与より、もっと原始的な女性上位であったと思われる。

一代神武紀に出てくる兄猪・弟猪、兄磯城・弟磯城、兄倉下・弟倉下と、ことさらに男という文字をつけない。男弟と、ことわるからには葉江（はえ）は現在でいう姉であろう。

また葉江は長生きの権力者であったことも否定できない。第三代から第六代天皇まで皆葉江と男弟猪手のどちらかの女（むすめ）を皇后として扱っていることでもわかる。通い婚であろう。

この磯城の県主葉江は、娘を四人皇后にしている。一は、第三代安寧天皇第一の一書、川津媛、二は、古事記の安寧天皇の阿久斗比売、三は、

結局、葉江の女の皇后達は、次期磯城県主候補だったのであろう。葉

江が長生きのためそれがはたせなかつた。第七代孝靈天皇の本文の皇后細媛の親磯城県主大目は、古事記では十市県主の祖大目とあり、傍流の磯城県主らしい。

師木県主の祖（おや）河俣毘売（古事記、第二代綏靖天皇の皇后）と同じ師木県主の祖、賦登麻和訶比売、亦の名、飯日比売（古事記、第四代懿徳天皇の皇后）はズバリ県主の女親であり、皇后本人である。また、祖は二人いることで始祖でも遠祖でもない、ただの親（おや）である。皇后本人も県主である可能性あり。

第四代懿徳天皇の第二の一書の皇后飯日媛は磯城県主の太真稚（ふとまわか）彦の女であるという。そして、古事記は、飯日比売の亦の名は師木県主の祖（おや）賦登麻和訶（ふとまわか）比売であるという。親と子が磯城の県主の賦登麻和訶比売は県主ではないのか。また気になるのは、フトマワカ彦・フトマワカ比売の親子は、親子統治などしていたのではないか。

第十一代垂仁天皇が反乱を起した、狭穂彦王、狭穂姫（古事記では沙本毘古・沙本毘売）の兄妹統治などは地域は奈良市佐保で、磯城は奈良県磯城郡、同じ奈良県で風習も似ているのかも知れない。

三人づつの天皇（権力者）さがしと簡単に言ったが、実際には非常に複雑な様相を呈してきたのである。

「多元」十六号正誤表

左記の間違ひがありましたので訂正いたします。

- ◆1頁「穂高紀行」
- 1頁2段「朝日カルチャー」↓「朝日カルチャー」
- ◆2頁2段5行「ベルナル」↓「ベルナル」
- 4頁3段14行「そう見続きた」↓「そう見えた。」
- ◆5頁「出雲銅鐸に関するデスクリサーチ」
- 3段1行「4、奈良県上町・豊岡市気比」↓「奈良県上町」を除く
- 3段行5、6行、「同様で、この二つは出雲のと…」↓「気比遺跡のものも、出雲の加茂岩倉のもの…」
- 3段10行「5、同範銅鐸の問題」↓「同範銅鐸の鑄型の問題…」
- 4段5行、「1期の銅鐸は…」↓「1期のA型は…」
- ◆17頁「海の古代史」訂正出版出来
- 4段5行「石原さん」↓「石毛さん」
- ◆18頁事務局便り2段2行「日野清子」↓「日野千江子」
- ◆FROM編集室
- 「今年最期」↓「今年最後」

穂高神社とオビシヤ

三鷹市 富永 長三

「穂高紀行」(多元一六号)を読みながら、穂高神社には確かオビシヤがあったはず、と思いつながらも忙しさに紛れて忘れていた。手元の『穂高神社とその伝統文化』(青木治著、穂高神社社務所)によって、穂高神社の奉射祭(御奉射)を見てみよう。記録のうえでは明応十年(一五〇一)の、三宮穂高社御造宮定日記が初見という。日取りはもとは旧暦一月十七日、明治以降は新暦三月十七日午後三時。神の矢二本・鷹羽の矢十二本を射て、その命中により年占いがされた。終わると矢と大的は参集の群衆が奪い合い、大的は減茶減茶に壊され、その破片は授与の弓矢と共に家に持ち帰り、神棚に供えたり戸口に懸け、魔除けとした。弓は五尺二寸、檜(桑)の木を用いる。的は五尺二寸、檜か樺(さわら)の薄板割りを網代に組み、円形に作り、白紙を張り同心円を描く。同心円を描くには定木を用いる。定木は、長さ三尺二寸・幅二寸五分・厚さ三分、根本に穴、側面に三段六所の切り込み。穴に釘を刺して紙の中心に当て、筆を切り込みに挟んで三段の輪を描く。的の裏面には、甲乙ム(こうおつなし)の三字を組

み合わせて、鬼の文字を書く。矢は神の矢二本は、三枚矧ぎの長さ六寸の奉書紙をつけ、矢じりを斜めに切り、先を尖らす。他の十二本の矢は鷹の羽を矧ぎ、ヌルデの木で作った長さ三寸の円形の鏑を先端に付けて鏑矢とする。さて萩原法子氏のお話を振り返ってみると、『多元』六号、一一号参照)オビシヤの的にはいくつかの種類があった。

- 1、三本足の烏を描くもの。
- 2、二本足の烏、足の無いもの、図案化された烏を描くもの。
- 3、烏が他の動物・鳥にかわっているもの。
- 4、鬼と描かれるもの(甲乙ムをふくむ)。
- 5、同心円だけのもの。

この他、弓を射る行事そのものが失われ、頭屋わたし、または会食だけのオビシヤも各地にあることを教えていただいた。さて穂高神社の御奉射の的は4、にあたる。また的を破ることにオビシヤの基本的意味がある、と萩原氏は説かれる。穂高神社の的のように、粉々に壊される例をいくつかお話ししていただいた。また的を描く定木は、東京の御霊神

社にも伝えられていた。その他桑の木、等々あれこれ考え合わせてみると、穂高神社の御奉射も、関東のオビシヤと無縁ではなさそうである。

三本足の烏を描いた的を射る神事……オビシヤが、千葉県北部・茨城県南部に濃密に分布し、あとは遠く離れて、島根県・隠岐の島周辺と、新潟県に二例という分布図は不思議であった。かつてこれらの地域を結

ぶルートがあったのではないか。その一つの可能性をここ穂高神社の御奉射に見てもいいのではなからうか。いまだ現地も見ずしての妄言、お許しください。皆様の調査研究をお待ちします。なお鬼の字を書く神社は他に、御霊神社(京都市上京区御霊前)松尾神社(京都市右京区嵐山)物部神社(島根県太田市川合町川合)弥彦神社(新潟県西蒲原郡弥彦村)等あげられている。

アラハバキを探す

小金井市 鴨下 武之

◇隣国のアラハバキ 二

▼甲斐の国

甲斐には天保三年の時点で、富士吉田の淺間神社の随神門にアラハバキと呼ばれる神像があったことが、府中市大國魂神社の猿渡文書で知ることが出来た。(多元六号参照)

甲斐にも江戸後期の地誌に「甲斐国志」(一一八四)がある。

都留郡下和田井村の項に「百蔵山春日明神 本村氏神ナリ地藏立像アラハ、キ式体衣冠形座像背後二文明十五癸卯ノ銘アリ……」と記述されている。(文明一五年は一四八三年)

「アラハバキ地藏が有る」と書かれたものもあるが、アラハ、キ式体

は衣冠形座像とあるので、「地藏立像とは別に随神像があり、それをアラハ、キと称していた。」と解すべきであろう。

その神社は、現在大月市の日本三奇橋として有名な猿橋を渡って約一km、そこから百蔵山に向かって約一km登った中腹にある。小高い丘全体に鬱蒼とした杜があり、そこが神社である。といっても、道は完全に舗装され、周囲は住宅地として開発が進められている。

四脚の付いた立派な鳥居から石段を上がるが、期待した随神門はなく、拜殿替わりの集会場のような建物の後ろに、小柄だが見事な彫刻を飾った本殿がある。随神像らしきものは、

見当たらない。

神社の前の奈良家が、甲斐国志にある古代から続いた神官の家で、この家付娘という七〇才位の婦人に話を伺った。「子供の時から神社で遊んでいたが、随神像のようなものは知らない。」とのことで、隣にある旧別当寺の花井寺も奈良家のものであるし、現在神主は専門の人に頼んでいるので、さらに分るはずはないであろう。そのようなわけで、それ以上の探索はあきらめた。

さて、花井寺には、山梨県指定文化財の大般若経があり、その碑には「花井寺は寛和二年（九八六）に百蔵大明神・神主奈良某が建立した」とある。この神社の創建は、さらに古いこととなる。アラハ、キの背後の年代が、戦国時代に入り始める頃のものであっても、不思議はない。

▼上総の国

「武蔵国の境は下総であって、上総ではない。」と言われる方もいらっしゃると思いますが、そこはまあ堅いことを言わずにお願いします。近江雅和著「記紀解体」によると、姉崎神社にアラハバキがあるらしい。今まで江戸後期の地誌を事前資料に使っていたが、千葉県の教育委員会に問い合わせると、大正年間に発行された市原郡誌しかないとのこと。

それによれば、姉崎神社は式内社で、「祭神志那斗弁命は志那都比古命（島穴神社の祭神）の妃。景行天皇四十年十一月、日本武尊東征の時、始めて祀る」となっている。現在の住所は市原市姉崎で、JR内房線姉ヶ崎駅から五百米位のところにある。平地の長い参道につづき、丘が突き出したところから約二百段の曲がった石段があり、途中神泉があった大勢の人がポリ容器を持って行列を作っている。さらにあがった段丘の上には本殿があり、海に向った見晴らしが良い。

本殿裏の末社十五社は完全な長屋スタイルで鎮座している。その中に「新波々木社・句句廻馳命」がある。アラハが「新」なのもめずらしく、また、ハバキが脛巾でないのも好感が持てる。

また、祭神が木の神「句句廻馳」（紀、第五段・本文他。記、久久能智）と言うのも始めてである。

本殿の祭神「志那斗弁命」は、紀第五段・第六書の風の神「級長戸辺命、亦の名は級長津彦命」、記の「志那都比古神」であろう。

先に触れた市原郡誌には「志那斗弁命」は「志那都比古命」の妃と、男女2神のように書いてあるが、ちなみに島穴神社は約五百米北に鎮座している。

本殿には日本武尊と天兒屋根命が後乗りしているし、末社もその目で見れば、菅原神社と東照宮を除いて全て記紀の神である。

何か一度大整理が行われたようだ。元来は島穴神社が男、姉ヶ崎神社が

女の土地の神を祀っていたのだろうと思う。あるいは、アラハバキかもしれぬ。

なお、市原市は「遺跡を歩く会」でお分かりのように、上総国府のあったところで、見るところも多い。

舟葬墓の発見

——大寺山洞穴発掘

三鷹市 富永 長三

南房総・館山市に、安房の大寺と称される総持院がある。その裏山に大寺山洞穴と呼ばれる三基の海食洞穴があり、この洞穴を千葉大学考古学研究室が一九九三年以来発掘調査を続けている。その結果この洞穴が古墳時代の舟葬墓であることが判明した。三基の洞穴のうち南側の第一洞は、開口部で幅五メートル・高さ四メートル・奥行き二九メートルを測る。ここから十基以上の木棺が出土し、いづれも丸木舟を利用したもので舟先を開口部（海）に向けている。全長が判るものはない。木棺の周囲を礫・木炭・黒色粘質土で安定させ、既存の木棺の上に横木を渡して新たに木棺を納めている。一部舟塗の痕跡が認められる。二号木棺には舟先を頭にして三体の人骨が納められていた。他の人骨は散乱してお

り、どの棺に伴うのかは不明。副葬品も玉類を除いて元位置は不明。各木棺の安置方法、安置順序、木棺と副葬品の関係も解明出来てはいない。副葬品には土師器・須恵器の土器類、甲冑・太刀・剣・刀子・斧等の鉄製品、管玉・勾玉・耳環等の装身具。時期は土器や他の遺物の年代観によって、五世紀代から七世紀前半代まで継続して墓域として使用されていた。いづれの副葬品も東国の古墳から出土する副葬品と比べて遜色が無い。特に三角板革綴衝角付冑・三角板革綴単甲・横矧板鋌留単甲の甲冑類は、東国での出土例は少なく貴重品である。これらに混じり和鏡（鎌倉時代）も出土しており、後世攪乱をうけた可能性が高い。以下、現時点での成果の要約である。

一、洞穴を利用した古墳時代の特異な墓であり、舟葬墓として考古学的に確認される最初の事例である。遺物の年代観から、五世紀から七世紀前半まで継続されている事が確認された。

二、舟葬墓から出土した遺物は、東国の大型古墳の副葬品に匹敵する内容を持ち、独自の舟葬儀礼を継承する在地の支配層と、その一族の奥津域と推定される。

三、仕切板上面に残る摩擦痕から、丸木舟は実際に使用されていたものを利用してしていると推定され、棺として転用する際に丹を塗ったと考えられる。

四、棺を洞穴の地表に安置しただけか、掘って埋納したのか、なお検証が必要だが、墓域は認められず安置しただけの可能性が高い。

五、折り重なるように棺が検出され、棺と棺の間に横木を差し込んで安定を図っていることから木棺を継段状に重ねて安置したと考えられる。

六、棺に蓋があったかどうか、現段階では不明である。

七、遺体が三体残っていた二号木棺から見て追葬されている可能性が高い。

八、装身具類は遺骸と共に棺内に納められているが、他の副葬品は地表に置かれていたと考えられる。

九、後世まで棺や副葬品が露出していたために攪乱が激しいと推定される。

十、洞穴開口部における閉塞施設の有無は今後の課題の一つである。

さて古墳時代の洞穴葬は安房に限らない。(安房にも鉈切洞穴等あり) 対岸の三浦半島には大浦山洞穴他、伊豆半島、さらに紀伊半島の磯間岩陰遺跡、東北には石巻市の五松山洞穴、また出雲の猪目洞穴等々知られている。

また舟葬が初めて問題にされたのは一九一二年大道弘雄氏の大仙古墳に隣接する塚廻古墳の発掘調査である。氏は粘土槨の形から、なかにくるまれていた木棺が丸木舟の形をした棺と推定し、舟葬の存在を提唱した。その後一九二九年に後藤守一氏は群馬県の赤堀茶臼山古墳を発掘し、木炭槨の形状から木炭舟と呼び、これを舟葬の著しい例とした。さらに宮崎県の西都原第一六九号古墳出土の埴輪片から舟形埴輪を見出し、世界の考古・民族例に舟葬を求め、古代人が舟の棺を用いたこと、船形埴輪は死者の靈魂が黄泉国へ導かれるように埴丘上に置かれたものであり、舟葬のあらわれだと説いた。

これに対し、伊東信男・小林行雄両氏は舟葬論への批判を展開した。これまでの舟葬とされてきた諸例が、

割竹形木棺を納めた粘土槨を見誤ったものと説いた。以後考古学の世界では舟葬論は進展せず、民族学・神話学の分野で舟葬論は展開された。

一九六八年埼玉県稲荷山古墳で舟形の礫槨が発掘された。しかし舟形木棺の埋納跡とはせずに割竹木棺の痕跡とされた。その後一九八一年静岡県藤枝市の若王子古墳群が発掘され一二号墳・一九号墳で、木棺の木質が黒褐色の有機質土に置き換わっており、(つまり有機質土イコール木棺の姿である。)それが舟形を示していた。調査者の磯部武男氏は報告文で舟葬を論じ、さらに一九八九年「舟葬考」(『藤枝市博物館年報・紀要』)を発表し、古代の舟葬を積極的に説いた。そして今日、大寺山洞穴で、考古学的に最初の舟葬墓の発掘を迎えた。(一九九六年九月三〇日、千葉県中央博物館・歴史講座での千葉大学・岡本東三氏のお話を中心に、後半は辰己和弘著「『黄泉国』の考古学」からの引用を加えながらまとめた。)古墳時代とは、古墳埋葬一色であったかのように思われてきた。だが事実が多様であった。舟葬については次の二点についても合わせて考えてみたい。

『隋書』倭国伝「……葬置屍船上陸地牽之或以小輿……」の一節(先行説あり)。「万葉集」東歌

の信濃国相聞往来歌四首、とりわけ三四〇一番歌、

「中洲(なかまな)に浮き居る舟の漕ぎ出なば逢こと難し今日にしあらずは」

の解釈は舟葬を前提にすることにより、良く理解出来る、とは例会報告その他でふれてきた。また各地の舟を引く祭り、「御舟祭」についてもあわせて考えてみたい。

なお先に挙げた辰己和弘氏の著書を紹介しておく。氏は最新の考古学的成果をもとに古墳時代の他界観念を追及し、新たな古墳時代観を展開されている。とくに1、には各地の舟葬例が記されており、なかでも、アジサシを抱いて葬られた少年・岩間岩陰遺跡の記述は心に残る。

- 1、『「黄泉の国」の考古学」、講談社現代新書、一九九六年
- 2、『埴輪と絵画の古代学」、白水社、一九九二年
- 3、『高殿の古代学……豪族の居館と王権祭儀』、白水社、一九九〇年





山田宗睦

日本書紀講座

第二十一回

スサノヲ、出雲へ到る

第八段の本文に入る。第八段で書紀全三十巻の内の巻第一を終えることになる。ここは高天原を追放されたスサノヲが出雲へ降りてきてヤマタノヲロチを退治し、奇稲田姫を娶って出雲の始祖になる話である。

以下、山田先生の講義の概要。

書紀は出雲に冷淡だが、古事記は出雲を大切にしている。出雲の分量が書紀と古事記とでは、全く違う。書紀では非常に少ない。ヤマタノヲロチの話は神話学者によって、ヨーロッパやアジア各地の神話との類似性が明らかにされ、ペルセウス・アンドロメダ型神話という、英雄のドラゴン退治の話の一類型として扱われている。ギリシアから中央アジアを経て中国に至り、揚子江地域に同型の神話が存在するが、これが筑紫へ伝わったと考えられる。しかし、神話問の類似性を強調することも大事だが差異も重視したい。奇稲田姫の父は国神と称している

が、ここは天神に対する国神ではない。土地の神と解する折口説を支持したい。国神であれば、常に天神のライバルとするような教条的な見方はとらない。また、ヤマタノヲロチの八がこの所でよく出てくることは確かだが、これを「聖数」とする解釈には抵抗がある。作者は二、四、八といった偶数が好みのようなだが好みと聖数とは違う。ただ私案もないので、いい考えがあれば教えて欲しい。

次に「湯津爪櫛」という言葉。この湯津には二つの意味があるが、岩波体系本で井上光貞氏が「神聖なる」という説を出して以来、皆いつせいにこの解釈になびいた。権威に弱いとしかいえないが、湯津は五百箇がまつたものであり、たくさんという意味であるはずだ。

ヤマタノヲロチの尾から出てきた草薙剣は初出であるが、ヤマトタケルのことを挿入しているのは、正に蛇足である。このヤマタノヲロチ神話は出雲か筑紫かというところ、出雲に冷淡な書紀が出雲と明記しているから、出雲神話とみてよいのではないか。スサノヲはこの剣を天神に献上するが、この天神はアマテラス、タカミムスヒ、抽象的な神という三つの意味が考えられるが、ここでは最後の意味だろう。

スサノヲは奇稲田姫と結婚して清地（すが）の地に住むが、姫は赤ん坊だったはずで、アツという間に成人したことになる。神話における赤ん坊はなかなか重要で、世界各地にこうした例があることは、二十世紀最大の神話学者といわれるケレーニも指摘している。そして、「やくもたつ……」という有名な歌。これは書紀における最初の歌である。書紀には二百以上の歌が出てくる。この歌は後代のもので、元は出雲地方の、七世紀頃の新築祝いの歌であったと考えられる。書紀とは別のものであったことから、「独立歌」といわれる。これは「源氏物語」に出てくる歌が紫式部の作であることとは、大いに異なる。スサノヲは根の国へいったとあるが、これは母のいる本籍地の意である。書紀には根の国は十回出現するが、すべてスサノヲと関係がある。これはスサノヲという神の本体が母に置いていかれて泣いて

いる神であることを物語る。それが三貴子の一人にさせられたため、無理を生じることになるのである。……日本神話の中で最も興味のある神様はスサノヲであろう。なんとも人間臭い神様だが、その実像をどう考えればよいのか？出雲と高天原、九州、大和との関係は？神代のハイライトを山田先生がどう説くか、大きな楽しみである。（木村山紀雄・記）



博物館の特別展示のご案内

「縄文時代の装身具」2/23まで

岩宿文化史料館

☎〇二二七―七六一―七〇一

二月一六日(日)午後一時半

郷土史講座「千網谷戸遺跡と耳飾」

桐生市教育委員会 増田 修

「宮城県の貝塚」3/2まで

加曾利貝塚博物館

☎〇四三―二三一―〇一二九

「ユーラシア文明の交感」2/23まで

横浜市立博物館

☎〇四五―九二一―七七七七

朝霞市立博物館 2/12開館

☎〇四八―四六九―二二八五

遺跡散歩小旅行

東京都埋蔵文化財センターを訪ねて

一月十二日、晴れ、寒中とは思えない暖かな陽射しだった。しかしここ多摩ニュータウンの日陰には、一週間前の雪が残っていた。今日訪れる東京都埋蔵文化財センターは土日、祝日も開館しており、また駅から近く、大変利用しやすい施設である。まず映画「森と縄文人」を見て縄文時代のイメージをふくらませる。

◇

寒冷な後期旧石器時代も一万三千年前から暖かくなり、氷河は後退し、日本列島は大陸から切り離される。長く続いたナイフ型石器に替わって尖頭器の時代になる。続いて細石器、石鏃が登場し、土器も登場する。縄文時代の始まりである。大型獣は北に去り、鹿・猪に代表される中型、小型の獣しか取れない環境に変わった。一方温暖化は森林の出現をみた。春の野草に始まり秋の木の実、森は豊かな食料をもたらしてくれた。だが冬はそれらには無い。狩猟だけでは冬を越す食料は賄えない。貯蔵の必要が生じた。また敏捷な小型獣を狩るには槍では難しい。木の

富な熱帯。大型獣の狩猟が可能な北の地方。そうではない中緯度の地域に土器や弓矢が発明される必然性があつたのではないか。弓矢と土器の発明は安定した定住生活を保証し、加えて毎年河川を遡上する鮭・鱒をはじめとする漁業技術の獲得、そこに北と南に連なる栽培植物をプラスし、成熟した縄文時代を形勢した。

◇

さて展示室には五万年前の石器に始まって奈良・平安時代まで、コンコースには汐留遺跡の出土品も展示されている。なかでも注目したいのは、シベリアのグロマトーハ遺跡出土の土器であった。もちろん完形ではない。この尖底の土器の紋様が、新潟県、壬遺跡（しん）の土器の紋様と似ているといわれている。また小型の土偶のなかに、腹部を中空に作り、なかに土玉を入れて作られているものがある。胎児を表現しているという。土偶はここでは中期から後期に多く見付かる。その他落し穴は多摩でも多数見付かっているが、その落し穴の中に植え込まれている竹の先が、尖っていないで平になっている。落ちた獣を死なせず生け捕りにし、た

だ身動き出来なくさせるためである。新鮮な肉を獲得するための知恵であろうという。

そのほか土器や石器、一つ一つの出土品が、それぞれの時代を語り掛けてくれているようであり、去り難い。また敷地の一部には縄文庭園が造られている。前期、中期の住居が復元されており、樹木も想定されるものが植えられている。住居の中で保存のために火が燃やされていた。意外に暖かい。ここで猪鍋でも囲みながら、縄文時代を語り明かすのもいいなあ、などとふと思った。その後、多摩境駅近くの田端遺跡を見た。

正式には田端環状積石遺構という。この遺跡は中期の中頃から晩期の中頃まで連続的に構築された。東西約九メートル、南北約七メートルの範囲に、大小数百個の自然礫を帯状に積み上げ環形に巡る。周辺部には周石墓七基、土壙墓二四基、組石六基がある。集積墓、土壙墓からは骨粉と副葬品と思われる小形の土器・玉・耳飾り等が検出された。また積み石の間や内部からは石棒・刻線礫・大珠・小玉類・土偶・石皿等多数発見されている。縄文社会を考察するのに極めて興味深い遺構だ。

◇

さて近くに「札次大明神」という神社がある。境内の一角に一抱え程の

丸形の石が、しめ縄を張られて祭られている。これ程の石は赤土のなかに自然には存在しない。人間が運んだものである。いつの時代に。一説には神社の旧跡にあつたという。この石と田端遺跡との関係有りや無しや、今のわたしには解くすべを知らないが。

帰路、読売ランド駅近くの「穴沢天神社」に寄った。この神社は延喜式神名帳に載る式内社として知られている古社だ。武蔵国四十四座、多摩八社の一社とされる。社伝によれば、孝安天皇四年（前三八九）の創建という。さすれば武蔵国最古の神社の一つということになる。『武蔵の古社』の著者、菱沼勇氏は付近に横穴墓が三基あつたという。また神社の下を流れる三沢川に、社殿の下穴の奥から、清水がどどんわき出ていたという。現在は穴沢弁天が祭られており、水量は豊かではなく、洞穴は二度めのものであるという。そしてこれが穴沢の起源である。と社伝はいう。祭神は少彦名命。元禄七年（一六九〇）菅原道真を配祀した。つまり天神が先、菅原道真が後ということになる。

◇

暖かだった日も落ち、冷え込み始めた道を、今日の遺跡散歩を振り返りながら駅へと急いだ。（富永長三）

渤海から日本を見る――

木村 山紀雄

八、九世紀、現在の中国東北部、北朝鮮の地に海東の盛国と称された渤海という国があった。この国は新羅と唐によって滅ぼされた高句麗の一部の高官が北へ逃げて建国したものである。次第に勢力を貯え、唐にその存在を認めさせ、朝鮮を統一した新羅とならんで東北アジアの雄となった。しかし、高句麗の末裔であることから回りの新羅や唐とはしっくりいかなかった。そこで、渤海は遠交近攻の原則に従って、しきりに日本（奈良朝、平安朝）に友好を求めてくる。ここで想起されるのは七世紀に新羅と唐の連合軍に日本も百済や高句麗とともに手ひどくやられたことである。その高句麗の末裔である渤海が高句麗滅亡後、約六十年ぶりに日本へ使節を送ってくる。神亀四年（七二七年）のことである。

この間、朝鮮半島では激動が続いたが、日本とて同じである。倭国が滅び、近畿王家に統一された時期であるはずである。渤海国は日本のこの変化をどう認識していたのだろうか？渤海と日本との交流は、続日本紀から始まって六国史のいくつかに出てくる。また、「文華秀麗集」、

「経国集」など日本の漢詩集に渤海使節の作品が登場するなど、日渤海交流は、日唐のそれを上回るものがあった。残念ながら渤海自身の史書は残されていない。中国史書、朝鮮史書などにその断片が伺えるのみである。三十数回やってきた渤海使節の到着地が前半と後半ではきれいに分かれているのはなぜか？まだ、これといった積極的な主張をするに足るものを得てゐるわけではないが、引き続き渤海から日本を見て行きたいと考えている。

田島部長

の研究報道される

「海の十口代中史」（原書房、古田武彦編）で、HTLV遺伝子の分布から、中南米原住民の祖先と日本列島人との密接な関係を立証された愛知県がんセンター研究所の田島部長の業績が新聞紙上に報道されたので紹介する。（「SPORT」読売新聞（見出し））

アンデスのミイラから遺伝子採取
千五百〇千年前 計六体で成功

先住民・日本人「祖先同じ」探る

愛知県がんセンター研究所疫学部（田島和雄部長）と鹿児島大医学部ウイルス学教室（園田俊郎教授）は三日までに、南米チリとペルーの千五百年〇千年前のミイラ六体から細胞核の遺伝子を取り出すことに成功した。ミイラからの遺伝子採取は日本人研究者としては初めて。世界的には過去二例あるが、同時に六体はこれまでで最も多い。アンデス先住民と日本人の祖先が同一であることを裏付けるための研究の一環で、期待を集めている。田島部長と園田教授は五年前から、チリなど中南米五か国の先住民の血液の調査から、アンデス先住民が九州西南部の住民が持っているヒトT細胞白血病ウイルス（HTLVⅠ型）を多く保有していることを突き止め、アンデス先住民の祖先は日本列島に定着したアジア大陸の先住民とルーツが同じである可能性がクローズアップされるようになった。

田島部長はこれを裏付けるため、文部省の「南米先住民民族の人類遺伝学的研究班」の班長として二年前、チリ北部のアリカ、サンペドロ、ペルー南部のイロの三地域で、現地の考古学者らが発掘している千五百年〇千年前のミイラ約九十体から、遺

伝子を取り出す研究に取り組んだ。

ミイラの遺伝子がバラバラに壊れていることなどから作業は難航したが、特殊な作業を丹念に繰り返し、六体のミイラの骨髄細胞核からの遺伝子採取に成功。現在、遺伝子配列を特定する作業に入っている。

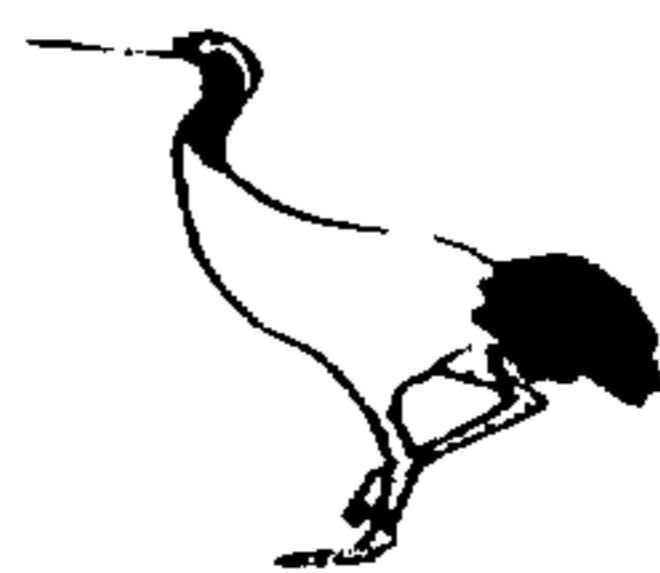
双方のルーツを探るのにミイラの遺伝子に着目したのは、千年以前の南米人には基本的に他の人種の遺伝子が混じっていないため。（下略）

読む

「倭人語で読む卑弥呼」

硯 郁子著

著者の硯さんは最近当会に入会した会員。序文によると著者は音韻の研究家で、その面からの歴史研究をまとめたのが本書であるということである。「倭人伝」と「紀・記」とを、音訓両方で（音は現代音であるらしい）読んで何等かの結論に至ったものらしい。内容が極めて複雑であり、限られた誌面で紹介するには適さないが、我こそと思わん方は取り組んで御覧になったらいかが。（新人物往来社刊 四六版二八三頁、二千円）



定例活動の報告

万葉集と漢文（十一月二十四日）

万葉集・東歌

◆未助国相聞歌・雲を仮る歌が十一首続いたあと、

三五二一「鴉とふ 大おそ鳥の まさでにも 来まさぬ君を兎る来とぞ 鳴く」は、鳥を仮りて、待つ人の心をうたう。慌て鳥が来る筈のない君が来たよとなくとする（通説）。

啼き声コロクから兎る来と聞いた。あわてたのは鳥ではなく来るか来るかと待つ人の方だろう。知能の高い、太陽のシンボルたる神聖な鳥が何故あわて鳥になるのだろうか。過去に神聖であった故に殊更に眩めたことも考えられる。

三五二二「昨夜こそは 兎るとさ 寝しか雲の上ゆ 鳴き行く鶴の ま遠く思ほゆ」は、鶴に寄せて、昨日共寝をしたばかりなのに、雲の上を飛び去る鶴の様に何と間遠く思はれることよとうたう。

◆漢文

隋書百濟伝、地理に「百濟は南新羅と接す」とあるのは誤伝か。北周書は東とする。住民「其人雜りて新羅・高麗・倭等有り、亦た中國人有り」と言う。因みに新羅伝には倭の

住民のことは無い。倭の多く居た地が南百濟地区ではなかったのかと想像するのはどうだろうか。

統文に「大姓八族」が挙げられているが、現代に韓国に多い金氏・李氏・朴氏などの姓はなく、聞き慣れない姓が出ているのも注目されよう。先に古田氏は近代日本による創氏改名が暴挙であることは論を待たないが、それ以前に中国の強力な影響による創氏改名があったことも事実であること指摘された。この資料から見ると、隋代にすでに姓氏の中国化が完了し、その後更にすっかり入れ替わるような改姓が行われたことがわかる。

明治書院『隋書東夷伝』によると、北周書百濟伝の官職記述がより詳しいようなので、これについて次回安藤氏から説明頂くこととする。

（小嶋記）

万葉集と漢文（十二月二十二日）

◆万葉集

三五二三「坂越えて 安部の田の面に居る鶴（たづ）の ともしき君は明日さへもがも」

この歌、たんに坂といひ固有名をいわない。「坂」で通用する程有名

な坂なのか。それとも村内に一つしかない坂なのか。『常陸国風土記』は足柄の岳坂より以東は吾姫の国であるという。この場合坂は自然地形ではなく、国境を意味する。坂は堺でもある。また『記・紀』の「ヨモツヒラ坂」の坂は生死を分かつ境界でもある。坂にも色々ある。その坂を越えて鶴が田にやって来る。その田を安部の田と今度は固有名を付ける。安部とは地名か、それとも人名か、それともまた別の意味を持つのか。また鶴は万葉では「たづ」と呼ぶのが普通だとされる。標記は「多豆・多頭」等が多く、歌語とされる。

一方で「相見鶴（アイミツル）かも」のように借訓で用いられる。また『新選字鏡』以下、古字書類では鷺・白鳥なども含んでいて、現代の鶴のイメージと同じではない。どの鳥を思い描くかによって、次の「ともしき君」の理解にも影響を及ぼすだろう。「ともし」とは「イ、少ない、乏しい。口、心が惹かれる。逢うこと・触れることが少ないために心が引きつけられる状態をいう。ハ、羨ましい」等と辞書にはある。「きみ（伎美）」もまた厄介である。一国の元首から、たんに女性から男性を指す語（男性から男性の場合も）でもある。「もがも」はある状態の実現を希望する助詞とも。これら多

様なそれぞれの単語の理解の上に立って、一首の滑らかな解釈はどうなるのであろうか。皆さんも一緒にどうぞ（富永）

◆漢文

隋書百濟伝の続き。前回の指摘に従って周書高麗・百濟伝の官職記述を比較する。百濟は確かに周書の方が詳細で内部矛盾もない。そのまま受け取れば周書の方が信頼できることになろう。しかし周書と隋書は相次いで編纂されており、後からできた隋書が杜撰だったという断定は、他の個所の周到さからも簡単にはできない。もっとも人念なテキストクリティークが必要になろう。高麗の官職記述は逆に隋書の方が詳しく確りしている。

ついでに高句麗と百濟の始祖神伝説について比較する。（北）魏書と梁書・隋書とは始祖の名前・事跡などに相互に異同があり、表面上はいづれかを誤りということになる。しかし元々同祖とされる両国のことだから、それぞれに異伝があってもそれぞれ採用の仕方が違うだけでも考えられる。

今回は暦法やタンムラ国の問題にも手を付けたが、結論を出すにはまだまだ資料不足であった。（安藤）

山田宗睦氏「日本書紀講座」

◆2月9日(日)午後1時半

2か月間のお休みを頂きましたが、第22回目の講座となります。関連する様々な話題を交えながら、巻第一(神代上)をじっくり読み進めてありますが、いよいよこの巻も仕上げりに近付きつつあります。

◆3月9日(日)午後1時半 第23回
◆4月13日(日)午後1時半第24回
万葉集と漢文を読む会

◆2月23日(日)午後1時

万葉集は巻第14「東歌」、漢文

は「隋書・東夷伝」を読み続けています。「既成概念にとらわれずに古典を読む」をモットーにして、楽しい研究会を続けています。

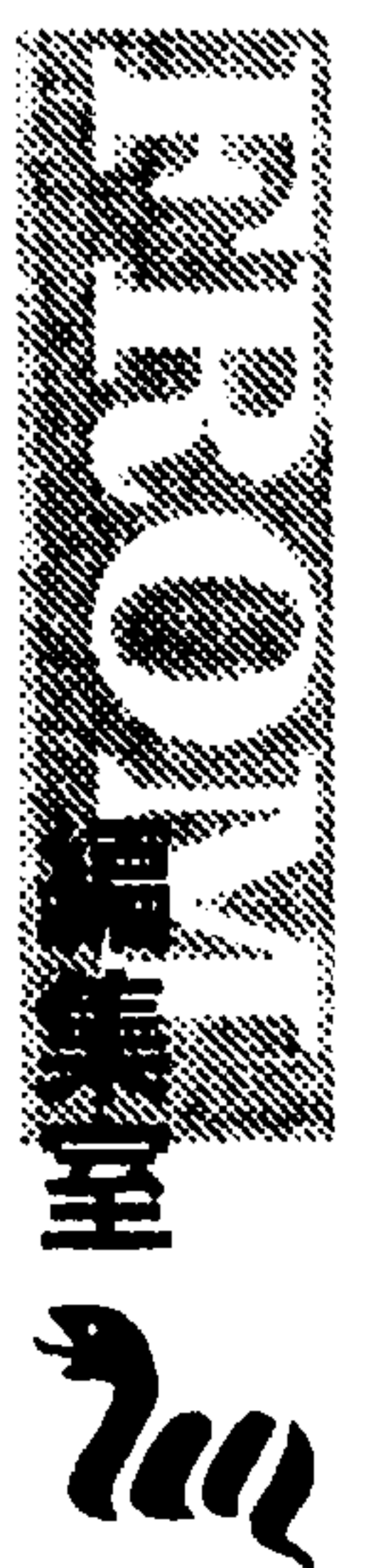
新入会会員募集

本会は「古田武彦氏の提唱された、歴史を多元的に観る考え方に賛同し、それを継承発展させる事を理念として、日本の古代の真実の姿を研究する会です。この様な取組方針に賛同する方々の入会を歓迎します。本会では隔月に機関紙を発行し、また中間月にはハガキニュースをお届けしています。会員による自主的な研究会を毎月開催すると同時に、外部

講師を招いての講演会、遺跡調査旅行などを実施しております。入会ご希望の方は、住所、氏名、電話番号を明記の上、入会金(千円)及び年会費(四千元)を、左記へお振込下さい。

* (郵便振替) 多元的古代研究会・関東、口座番号 00170・9・768777

なお、新会計年度は4月から始まりますが、今年初めに入会された方はその月から3月までの会費は払っていたただかなくても、機関誌と諸サービスを提供します。



◆この号もまたまた遅れてしまいました。ただでさえ遅れがちだった所へ、出雲への「遺跡巡りの旅」が急に具体化したための、嬉しい悲鳴です。

◆出雲といえば、次から次への情報で目まぐるしいくらい、こういう時に確りした判断の基幹となる見方を養う好機であると思います。今回の「付言」はその点参考になるのではないでしょうか。◆最近経験したことですが、古代の単位や数量についての解説が、往々にして後代の増補された学術的見解に左右されていることがよくあります。辞典や解説書必ずしも当てにならないこと、倭人伝の例を待つまでもない事です。

◆会員諸氏の原稿をお待ちしています。必ずしも学術的なものに限定しません。ただし採否および掲載時期はお任せ願います。また送られる原稿は必ずコピーを取っておいてください。(紛失の予防と打ち合わせの便宜のため) ◆編集者への連絡は下記へ・〒232横浜市南区永田みなみ台2・10・401 安藤哲朗 (☎045・742・1446、フアクスも)

多元の会 カレンダー

記入のない催しの会場は全て文京区民センターです

2月

2日(日) 午後1時 発表と懇談の会
講演 古賀達也氏
「九州年号金石文の再検討・付・和田家文書の伝承力」

9日(日) 午後1時半
山田宗睦氏「日本書紀講座」第22回

23日(日) 午後1時 万葉集と漢文を読む会

3月

2日(日) 午後1時 発表と懇談の会
話題提供者 斉藤里喜代氏
「オビシヤ神事と魚ふるい」
富永長三氏
「小銅鐸についての二三の感想」

9日(日) 午後1時半
山田宗睦氏「日本書紀講座」第23回

23日(日) 午後1時 万葉集と漢文を読む会

4月

5~7日(に「出雲の国遺跡巡りの旅」
(4月6日に予定された「発表と懇談の会」は中止)

13日(日) 午後1時半
山田宗睦氏「日本書紀講座」第24回

27日(日) 午後1時 万葉集と漢文を読む会

(哲朗誠惶誠恐頓首頓首謹言)